

# 日 本 の 点 字

## 第 41 号

---

### 目 次

点字に感謝 .....	ロイ・ビッショジト	…	1
日本点字委員会創立50年記念特別講演会記録 .....	日本点字委員会	…	6
点字と JIS と ISO .....	和田 勉	…	16
特集「当山啓さんを偲んで」 .....			24
当山さんをしのんで .....	木塚 泰弘	…	25
当山さんのこと・思い出すままに・少々 .....	植村 信也	…	26
当山啓さんを送る .....	金子 昭	…	28
点字関係文献目録（その16） .....			31
日本点字委員会第52回総会並びに研究協議会報告 .....			35
編集後記 .....			38

---

2017年6月

日 本 点 字 委 員 会



## 点字に感謝

日本点字委員会委員

滋賀県立盲学校教諭 ロイ・ビッショジト

私は、バングラデシュ出身の生まれつきの全盲である。来日してから20年、理療科教員として15年、日本点字委員会委員になってから3年が経過しようとしている。今の私がいるのは点字のおかげであると言っても決して過言ではない。私は点字に深い感謝と高い誇りを持っている。だから、金子副会長から「巻頭言を書いてほしい」という依頼があった時、二つ返事で引き受けた。

しかし、いざ書こうとなるとあれこれ考えてしまって文章が進まない。つたないものになると思うが、点字が私の人生に何を与え、どのように私を成長させてくれたかということを中心に述べることにする。

私はバングラデシュのネトロコナ県のモドゥアカリ村に生まれ、8人兄弟の末っ子で、唯一の視覚障害者であった。川と田んぼに囲まれ、当時は電気もなかった村で、良く言えば自然豊かなところで幼児期を過ごした。そして、家族の誰もが、点字の存在を知らなかった。これは田舎だからということではなく、全体的に母国ではまだ点字の存在を知らず、教育を受けられていない視覚障害者が大勢いるからだ。家族は私の目のことが心配で、ダッカをはじめ、都会のいろんな病院に連れていってくれた。ダッカからの帰りに、汽車の中で歌を歌いながら物貰いをしていた盲人を見て、母が泣いていたのを今でも覚えている。きっと、私の将来を案じての涙であっただろう。

お医者さんに目が治ることは不可能だと告げられ、家族の皆が絶望していた。その時、町会議員だった叔父が、同じ村の二人の盲人の兄弟と出会い、視覚障害者でも点字で勉強できる学校があることを知った。叔父は父に話し、父は母に話した。それを聞いて母は、何度も何度も泣いていた。理由は私が家を出ることの寂しさであった。最終的に、私は家から遠く離れたジャマルプル県の学校の寄宿舎に入って勉強することになった。寄宿舎には、視覚障害の生徒が10人おり、そこから普通学校に通ってそれぞれが異なる学年で晴眼者と一緒に学んでいた。寄宿舎には点字を教えるための先生がおられた。私はそこで初めて点字と出会えたのである。私の学年では、私だけが視覚障害者であった。点字は寄宿舎の先生や先輩に教えていただいた。それは、ベン

ガル語と英語の点字だった。

学校には点字の教科書はすべてそろっていなかった。特に、宗教という科目の教科書はどの学年でも点訳されていなかった。理由は確かではないが、イスラム教、ヒンドゥ教、キリスト教、仏教のどれを信仰しているかによって学習する宗教科目が異なってくるからだと思われる。

バングラデシュでは、カレッジや大学を除く学校は、1月に始まり、12月に終わるという教育課程である。私は、12月に年末試験等を終えて、冬休みに寄宿舎から家に帰っていた。その時、次の学年の宗教の教科書を借りてきて、父に読んでもらって点訳した。家の外で太陽がよく当たるところにマットを敷いて日光浴しながらの点訳であった。点字はとても珍しいため、通りがかりの大勢の人たちが立ち止まって興味深くその姿を見ていた。中1の時に父が亡くなり、その後は田舎の数名の友達に教科書を読んでもらうようお願いをした。彼らも熱心に協力してくれた。

母国では、「目が見えなければ何もできない」という考えが強く根付いている。そのうえ、視覚障害者は心が痛むような言葉で差別され、家族や社会の重荷として扱われることが多い。私はどうしてもこの状況を払拭したい気持ちでいっぱいだった。私は、目が見えなくても努力すればできる、社会に役立つ存在になりうるということを皆に示したかった。だから、点字を使っての勉強に一生懸命励んだ。

実は、もう一つ勉強に励んだ理由があった。今になって言えることだが…。それは初恋の女の子に褒めてもらいたかったからである。バングラデシュでは、クラスの名簿の順位は五十音ではなく、成績順なので、成績があがればすぐに分かってもらえた。その女の子には家に連れて行ってもらい、お母さんとも仲良くなった。やがて、お母さんもお姉さんも点訳の大きな力になってくれた。共働きのお母さんは自分の食事を後回しにしてまで、私に本を読んでくれていた。学年が上がるに連れて、教科も内容も増えていき、クラスメイトたちも教科書を読んでもくれるようになった。点訳に時間が掛かり、勉強の時間を確保するため、毎朝4時半に起きて勉強することが習慣になっていた。おかげでいつもクラスで1位になり、高校やカレッジへと進んだ。そして、夢のダッカ大学にも入学できた。ちなみに、バングラデシュの教育制度は、小学校5年、高等学校5年、カレッジ2年、大学4年である。

ダッカ大学に入ってから半年。偶然に偶然が重なり、運も味方をしてくれて日本に留学できる機会に恵まれた。それは国際視覚障害者援護協会の奨学金での留学であった。詳しいことは省略するが、そこでも点字が役立っていた。面接の際、援護協会の

理事長に「3日間で日本語の点字をどこまで習得できるかを見る」と言われていた。その場で日本語の点字を教えてもらい、五十音の覚えやすい組み合わせに感動し、一生懸命挑戦した。おかげで奨学金をいただくことになった。

1996年3月8日に来日し、4月から高知県立盲学校に入学した。素晴らしい先生方に恵まれたこと、そして学習手段が漢字を使用する墨字ではなく、カナ書きの点字であったことで、私は理療科の困難な学習をこなすことができた。もし学習手段が漢字を使用した墨字だったら、漢字圏の国の出身者ではない私にとって、相当厳しかったことに違いない。その意味で非常に助かった。母国とは違って、教科書はすべて点字で用意されていたので、思う存分勉強ができたのも大きかった。そして、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家試験を点字で受験し、無事に合格することができた。

私は高知盲在学中、日本語力を確かめるため、日本語能力試験の1級を受験したことがあった。過去の問題等を点訳してもらい、理療科の勉強と並行して進めていった。試験会場は東京だった。問題を解きながら、「1級はこんなにやさしいのか？」と思いながらにこにこして解答用紙を試験官に渡そうとした。その時、ある分厚いものに手が触れた。「なんだこれ？」と触ってびっくり！ 実はあと何冊も問題が残っていた。ショックで動けないくらいだった。全体を触って確認しておかなかった自分自身が情けなかった。結果は予想通り不合格だった。まさに自業自得であった。その後、筑波大学理療科教員養成施設に入学してから同試験に再挑戦し、無事に合格することができた。語彙や漢字、読解の問題に点字使用者に対する配慮も十分見られた。

点字を通しての夢は、その後も広がった。私はバングラデシュでの学生時代、英語が大好きで、実は大学で英語を学びたかった。しかし、日本に留学したので、その実現には至らなかった。教員として6年目を迎えたある日、社会人でも通信教育で英米文学の勉強ができることを知り、早速憧れの英米学科に入学した。大学の膨大なテキストを、日本の多くのボランティアさんに点訳していただいた。試験は点字で受けることが可能だった。お蔭で学習を順調に進めることができ、2011年に無事に大学を卒業した。そして、中学校及び高等学校の英語の教員免許を取得できた。現在は、この大学・佛教大学の大学院に在籍している。

点字と出会ってから数10年が経過しようとしている。その中で、バングラデシュと日本とは点字に対する周りの反応も様々であることを感じた。バングラデシュの学校の寄宿舎にいた時、外部の人が見学に来たことがあった。点字の読み書きなどを紹

介すると、非常に興味深く、かつ不思議に思っていたことを今でも覚えている。「触っただけでこんなに速く読めるの？ それとも、全部覚えているの？」というふうに言われたこともあった。

一方、日本では小学校から点字は紹介されている。我が子が4年生の時に、国語の教科書を持ってきて、「ここに点字で書いてあるよ」と言って触らせてくれた。触ってみると、本当に五十音が書いてあった。言葉で言い表せないほど感動した。

他方では、ショックを受けて驚いたこともあった。教員として10年が経過すると、10年経験者研修というものがある。私はその一環として、ある大学で研修を受けていた。前のほうに座り、教授の講義を聞きながら点字盤でノートを取っていた。しばらくすると、教授は「私はこの音が気になるけれど、皆さんは気にならないですか？」とおっしゃったのである。それは言うまでもなく、私の点字盤の音であった。研修を受けていたほかの先生方は何も言わなかったので、私はそのまま書き続けていた。このような経験は初めてだった。終わってからのアンケートにはこのことについて触れ、今後こういったことが起きないように対策を取ってほしいと要望した。

情報技術が進み、視覚障害者にとって不可能と思われていた墨字の読み書きができるようになり、情報収集もしやすくなった。しかし、その中でも点字の代わりになるものはないと私は思っている。点字は文字であり、文字としての役割は墨字のそれとは同等である。このことをもっと多くの人に認識してもらう必要があると私は感じている。母国バングラデシュでは、学校の間試験や期末試験は点字で受けられるが、残念ながら学校卒業のために行われる全国一斉の試験はまだ点字で受けられない。カレッジや大学でも点字受験はできない。そういった場合は、受験者が口頭で解答したものを書いてもらうことになっている。書いてくれる人は受験者の学習内容をまだ習っていない下の学年の生徒に限る。採用試験や選挙等も当然点字でできるレベルではない。

一方、日本では諸先輩方の努力によってこういったことは驚くほど進んでいる。しかし、日本でも採用試験等で点字受験を希望しても受けられない所がまだ残っている。私自身もこのような状態に遭遇したことがある。点字受験を希望しても「点訳してもらうのに、問題が漏れてしまう恐れがあるから点字受験は難しい」とか、「速く採点しなければならないので、パソコン受験してほしい」などと言われたのである。長文の問題は、パソコンやデージーで聞きながら解くことは点字使用者にとって非常に不利だと私は思っている。外国語であればその確率はさらに増していく。希望やニーズ

に応じて適切に対応していただくことを心から望んでいる。

日本語の点字を最初に教えていただいた時、点字に慣れている私は、これはよくできている、ベンガル語の点字よりずっとやさしいと思っていた。しかし、決してそうではない。知れば知るほど日本語の点字の奥深さが伝わってくる。日本点字委員会の委員になってから毎年の日点委総会や隔月の例会での活発な議論に加えさせていただき、肌でこのことを感じている。これからも誇りを持って点字と関わり、使いやすい点字、より良い点字及びその普及を目指して努力し続けたい。

最後になるが、バングラデシュの片田舎からダッカ大学、そこから日本への留学、そして今までの私…。もし目が見えていたら、こんなことはあっただろうか。答えは、きつとなかったであろう。見えなかったからできたことであると思う。それを可能にしてくれたのは、点字である。点字は私に教育という光を与えてくれた宝である。さらに、私に経済的自立だけではなく、心豊かな人生を送る機会も与えてくれた。だから、点字や点字の発明者であるルイ・ブライユに心から感謝し、点字をずっとずっと大切にしていきたい。

# 日本点字委員会創立50年記念特別講演会記録

日時：2016年6月5日(日曜) 午後3時～5時

会場：戸山サンライズ(全国障害者総合福祉センター) 大研修室

講師：

阿佐博氏(日本点字委員会顧問)

田中徹二氏(日本点字図書館理事長)

木塚泰弘氏(日本点字委員会会長)

日本における点字表記法の唯一の決定機関である日本点字委員会(日点委)は、今から50年前の1966年7月30日に発足した。この間、数度の改訂を経て、点字表記のよりどころとなる「日本点字表記法」を編集・発行してきたほか、点字の普及に関わる活動を行ってきた。

このたび、創立50年を迎えることを記念して、創立当初から日点委に深く関わってこられた3人の方々に講演していただいた。

阿佐氏は発足時から委員として関わり、1990年から1998年まで会長を務めた。生前の石川倉次氏に会ったことがあるという日本の点字の生き字引のような方である。田中氏は、日点委発足間もない時期に「日本語点字表記の問題点」という論文を発表することで、その方向性に大きな影響を与えた。木塚氏はこれまでのすべての「日本点字表記法」編集の中心人物であり、発足以来のすべての総会に出席するなど、日点委の歴史と共に歩んできた。

日本の点字のこれからを担う多くの皆さんに、日点委のこれまでの活動を知っていただき、点字を未来につなげていただきたいと願い、当日の講演会の要旨を掲載する。

## 「中村京太郎と点字表記」

阿佐 博

日本の点字ができたのは、明治23年(1890)である。そのときにできた点字は、50音と濁音だけであった。しかし当時は、日本語を表記するにはそれで間に合っていた。歴史的仮名遣いを使っていたので、拗音は仮名遣いで表現することができたからであ



る。たとえば「ちょうちょう(蝶々)」は「てふてふ」と書けばよかった。

拗音は必要がなかった。石川先生は、ローマ字論者であり、同時に仮名文字論者であったこともあり、点字でも音をそのまま表現するのが最も正しい日本語の表記であると考えておられた。

明治23年11月1日に点字選定会議というのが行われたのだが、その会議で石川倉次案が採用されて、日本の点字が生まれた。しかし先生自身は、それで満足していなかった。

その後も日本語を音のままに書ける方法はないかと、一人研究していた。研究を重ね、明治31年(1898)2月15日に拗音点字を発表した。これで日本語を表音的に書けるということになった。しかし表音的表記ではなく、昔から書いていた歴史的仮名遣いでいいのではないかと主張する人たちも多かった。そういうことで、拗音点字も、すぐには採用されなかった。明治32年(1899)7月6日に至って、東京盲学校一本当は東京盲啞学校なのだが一は学校として拗音点字を採用することを決めた。

明治34年(1901)4月22日、拗音を含めた点字が官報で発表された。本当はこの年月日が、日本で正式に点字を認めたという日になるが、選定会議で決まった明治23年11月1日が、点字記念日とされている。

歴史的な仮名遣いに慣れている人は、拗音を書く表音的な仮名遣いには反対であった。ここに中村京太郎(1880～1964)という人がいて、はじめから表音表記を主張した。

明治20年前後に東京盲学校には二つの研究会ができた。鍼按科の卒業生でつくった鍼按学友会と、音楽科の卒業生でつくったらくらく楽々会である。しかし同窓会の中に二つの組織があるのはまずい、という運動が起こり、明治30年(1897)、一つとなり、東京盲学校同窓会ができた。

同窓会を組織するために、規約作成の委員会が生まれた。その委員会に中村も加わった。在学中ではあったが、当時は卒業生の数も少なく、中村の優秀なことが見込まれたのであろう。明治30年(1897)、同窓会を設立し、中村は初代会長に就任した。

小西のぶはち信八という人がいた。明治27年(1894)に3代目の校長になる。明治29年(1896)から約1年半、欧米に盲啞教育の視察に出かけた。欧米に行って小西の驚いたことは、視覚障害者がほがらかに、生き生きと働いていることであった。

小西は、日本にもほがらかな、視覚障害をもった盲学校の教員をつくりたいと思った。帰ってきて目についたのが、中村であった。明治33年(1900)、中村が東京盲学校を卒業。卒業と同時に、母校の普通科教員に任命された。視覚障害者が同校の普通科

教員になった第1号である。中村は教員として成績をあげると同時に、同窓会の会長としても活躍し、点字出版部をつくった。最初につくったのは、「帝国憲法」であったが、その中で中村は、表音的仮名遣いを用いた。その後、医学書など数冊出版したが、すべて表音的表記であった。まだ表音的表記に抵抗をもっている人も多く、かなり批判も受けたが、中村は表音的表記を続けた。鍼按学友会から「盲人世界」という雑誌を出していたが、これも表音的表記に切り替えた。

明治35年(1902)、同窓会の総会があった。この総会において、歴史的仮名遣い派から、中村はつるし上げられる。「拗音を採用することは点字の普及を妨げ、ひいては盲教育の運命に関わる由々しき問題である」との意見が出された。中村は同窓会会報「盲人世界」の責任者として、同窓会の会長として、責任が追及された。そこにいた教員たちもいろいろ説明したのだが、会場の雰囲気は変わらなかった。このような批判を受けても、中村の表音表記への意思は微動だもしなかったが、責任を取ってその場において会長を辞任した。

これは歴史的仮名遣い派と表音的仮名遣い派との論争でもあった。しかし同時に、中村が母校の普通科の教員として名前をあげていたことに対する先輩たちのねたみもあったのではないかと、とも言われる出来事である。

翌明治36年(1903)に「盲人世界」を休止して、「むつぼしのひかり」という月刊の同窓会会報が発行された。これははじめから完全な表音的表記であった。中村の意思が踏襲されたということになる。その後も長い間、表音的仮名遣い派と歴史的仮名遣い派の論争があり、容易に決着しなかった。

明治40年(1907)、第1回日本盲啞学校教育大会が開かれた。今の全日盲研のようなものである。そのとき、「歴史的仮名遣いと表音的仮名遣い、いずれを可とすべきか」といった議題が出ている。雰囲気としては、表音的表記に傾いてはいたが、結論が出ていなかった。大正2年(1913)、第4回全国盲啞学校教育大会において「盲生に国語を教授するに歴史的仮名遣いと表音的仮名遣いの何れが宜しきや」、「点字の綴り方を音標的仮名遣いに一定するの可否」といった議題が出ている。

東京盲学校では大正3年ごろに表音的表記にすることを学校として決めている。東京盲学校師範部で教育を受けた人たちが全国の盲学校に散らばって行って教えるから、だいたい全国的に表音的表記に傾くわけである。

大正11年(1922)5月11日、「点字毎日」が発行された。私は大正11年4月8日に生まれている。同じ年の5月に誕生した「点毎」より、約1か月兄貴になる。「点字毎

日」に初代主筆として就任したのが、中村である。中村京太郎という人は、表音的表記を使って「点毎」を発行した。

その後、日本点字の規則がいくつかつくられている。昭和3年(1928)には盲学校の国語の本を表記するのにどのような点字表記がよいか、ということになった。文部省で委員会をつくり、盲学校の代表者を集めて点字表記の決定をしている。その決定が中村の表記なのである。

その特徴は、例えば「言う」を発音どおりに「ユー」と書くことに現れている。今は動詞の活用の関係で、「イウ」と書くが…。当時の「点字毎日」も「ユー」であった。盲学校の教科書も「ユー」であった。日本点字図書館の本間一夫さんも、その中で育っているから、はじめは「ユー」だった。

日本点字研究会(日点研)が昭和30年(1955)にできた。盲学校の教科書の表記を一定にしなければならない、ということからだった。当時は東点、点毎、ライトハウスなどの表記がいくらかずつ違っていたが、それを統一しようということで、日点研ができた。できたとき、「ユー」を「イウ」と書くことが決議された。

日点の本間さんなどは、今まで「ユー」と書いてきた、どうしたものか、と悩んだ。日点委の「日本点字表記法 現代語篇」が出たとき「こうなった以上は、従うのがいいだろう」ということで、その後は本間さんも「イウ」と書くこととした。

中村が明治36年あたりから考えた点字表記が、日本の表記の中心だったと考えられる。今日は歴史的仮名遣いから表音的仮名遣いに、点字の表記が移っていったという点をお話した。それはひとえに中村京太郎の意思であった。当時はほかから出版物もそう多くは出ていないし、「点字毎日」がだいたい日本の点字表記の中心であった。

「点字毎日」のように書いておけば間違いない、という考えが、当時、点字の世界の通念であった。中村は昭和19年(1944)まで点毎の主筆であった。

当時は中村の考えが日本の点字の表記を決定していたという話である。

## 「点字とわたし」

田中徹二

### 当時、点字表記はばらばらだった

1954年、網膜剥離で10か月ほど入院していた間に点字を習った。長い入院期間中に点字を習得していた人がたまたまいて、点字を教えてくれたのだ。退院するころには、

「点字毎日」が拾い読みできていた。この点字が読めるということが、その後の私の人生に好影響を与えたのは間違いない。

1969年、私は東京都心身障害者福祉センターの視覚障害科指導員になった。仕事の一環として研究を課せられた私は、まず点字の表記について考えることにした。それは、当時些細な表記についてさえばらばらだったからである。

私は、当時、全国の点訳ボランティア養成で使われていた、日本点字図書館（日点）の「点訳のしおり」、点字の鬼と言われていた東京点字出版所（東点）の肥後基一所長の主張、盲人間で広く読まれていた「点字毎日」（点毎）、盲学校の先生たちの日本点字研究会（日点研）の表記の四つに注目した。この4表記の違いを、日本盲人福祉研究会（文月会）の機関誌「新時代」に掲載した。要点を以下に記す。

1. 仮名遣い 同音の連呼の場合、「チヂム、ツヅク」と「ヂ・ヅ」を用いていたのが、日点と東点、「ジ・ズ」を用いていたのが、点毎と日点研だった。連濁の場合は、「ソコヂカラ」の「ヂ・ヅ・ヂャ・ヂュ・ヂョ」を用いていたのが、日点・東点・日点研、「ミカズキ」のようにサ行の「ジ・ズ・ジャ・ジュ・ジョ」が点毎だった。

また、長音を使うのか、使わないのかでは、長音が日点、点毎、日点研で、「オカーサン、オーサカ」。東点は、「オカアサン、オオサカ」だった。

2. 符号 そもそも小数点から異なっていた。④⑥の点が日点、点毎、東点だったのに対し、③の点が日点研だった。点訳者注では、開き、閉じとも②③⑤⑥の点を二マス続けたのが、東点、日点研。②③⑤⑥の点、③⑥の点で開いて、③⑥の点、②③⑤⑥の点で閉じたのが、日点だった。

また、句読点については、使わなかったのが、日点、東点、点毎なのに対し、現在の句読点を認めていたのが日点研という有様だった。そのほか、繰り返し符号、行末のつなぎ符などについても、それぞれで認めたり、認めていなかったりした。さらに、現在では当然とされている、数字の後に数字に使われている文字が来たとき、③⑥のつなぎさえ認めず、マスあけをしていたのが点毎だった。

3. 分かち書き（マスあけ） マスあけは、仮名遣い、符号に比べて、はるかに複雑な違いがあった。助詞「ノ」に助動詞が続く場合、続けて書いたのが日点。「ガイコクノヨーニ」、「コノヨーナ、カクノゴトク」というものだが、マスあけしたのが点毎、日点研だった。東点は、1語としてみなしてよい言葉は続けて書いていた。助詞「ト」のあとに「シ、シテ」が来る場合では、一マスあけるのが、日点、点毎、東点なのに対し、「シテ」が助詞のときには続け、動詞の変化であるときは一マスあけ

るというように使い分けていたのが日点研だった。

「コ・ソ・ア・ド」の後に「スル」の変化が続く場合、続けて書いたのが、日点、東点で、コースル、アーシテとなる。一マスあけたのが、点毎、日点研だった。「コー□スル」「アー□シテ」である。「コ・ソ・ア・ド」の後に「イウ」が続くときでは、一マスあけていたのが、日点、点毎、日点研。続けていたのが、東点だった。困みに、当時は「イウ」を「ユー」と書いていたのが、日点と点毎だった。

「ナド」と「トー」の違いは、「ナド」は続け、「トー」をあけたのが、日点、東点。続けていたのが点毎、日点研。接頭語についても、それぞれで決めていたようだが、例を見ても、どういう理屈でそうなっているのか、私にはよくわからなかった。1971年、「日本点字表記法（現代語篇）」ができて、ここにあげたようなものは、ほぼ統一された。しかし、分かち書きについては、あまりにも複雑なため、具体的な例を示すことができず、点訳者が迷うことは、現在でも続いている。

### そのほかの点字との関わり

分かち書きについて、これだけいろんな議論があるなら、表記辞典のようなものを作ろうと、1981年、文月会の出版委員長をしていた私は、『点字表記辞典』を出版した。分かち書きに迷ったとき、辞典を引けばすむ。評判を取り、文月会の貴重な財源になった。今でも解散した文月会の後を引き受け、視覚障害者支援総合センターで発行している。

研究としては、点字カセットシステム研究会がある。1971年、東京都心身障害者福祉センターの研究費をもらい、当時の8ビットのコンピュータに、データの記録媒体としてカセットテープを使うという、時代を象徴するようなシステムでスタートした。この研究会の成果として、ブレイルマスター、ブレイルシャトルという実用機が開発されたのだった。ブレイルシャトルは、現役の点字製版機である。

もう一つの研究は、2008年、三菱財団研究助成をもらい、『アジアの点字』をまとめたことである。アジア地域25言語の点字の考案・発展過程と点字コードについて解説したものだ。各国の視覚障害者や点字関係者に、自国の点字について書いてもらった。例えば、インドには20言語ほどが使われているが、発音は似ているので、発音で点字を統一している、といったことを読み取ることができる。

世界の点字との関わりでは、まず、日点委が創立30周年を機に、翌年の1997年、ルイ・ブライユの故郷への旅行に参加した。当時の会長の阿佐博さんを筆頭に、ツアー

を組んでフランスを訪問したもの。パリのパンテオン、記念館になっているルイの生家、その近くにある墓などを訪ねた。

パンテオンには、フランスの偉人をまつた地下がある。その中に、ルイ・ブライユの遺骨も安置されていた。ブライユが、パンテオンにまつられたのは、亡くなって100年後の1952年のこと。近くには、エミール・ゾラ、ビクトール・ユーゴー、デュマといった大文豪の遺骨があった。

ブライユの生家には、彼がこれで目を傷つけたというナイフのようなものも置いてあった。墓は、記念館の裏のほうにあり、亡くなって100年、ここに眠っていたが、今では両手の遺骨だけが、白い箱に納められて残っている。

ブライユ生誕200年記念行事がパリで開催されたのは、2009年1月、彼の誕生日に因りのこと。バランタン・アウイ記念館、パリ盲学校などで会議が開かれた。私も参加し、「日本の点字」について話した。

これを機会に、世界盲人連合では、休眠状態にあった世界点字協議会を復活させた。各国で大きく違う数学表記の統一ができないかなど、さまざまな課題を検討しようというものだ。私は、アジア太平洋地域の代表として参加したが、2009年から2011年までの成果は、「点字21」という会議を2011年に開くこと、ユネスコから発行されている“World Braille Usage”（世界点字便覧）の第3版を発刊するということだけにとどまった。

世界点字会議「点字21」は、2011年、ドイツのライプチヒ大学で開催された。世界から400人を超す視覚障害者や関係者が参集し、大きな盛り上がりを見せた。世界には、まだまだ点字に関心を持つ人がこんなにいるのかと心強かった。

私は、昨年、岩波新書『不可能を可能に 一点字の世界を駆けぬける』を刊行した。これをお読みいただければ、私と点字との関わりについて、もっと詳しく知っていただけたと思う。

## 「日点委50年のいろいろ」

木塚泰弘

ちょうど澤田慶治先生の家近くを通ったときに、中村京太郎さんと初めてお会いし、ごあいさつした。そのときに、私はまだ附属盲学校の生徒だったのに、帽子を取

って、あいさつしてくださった。イギリス紳士だなと思ったことが印象に残っている。

私と日点委の関わりについてお話したい。

1955年(昭和30)、山口県立盲学校で開かれた全国盲教育研究大会において「日本点字研究会(日点研)」が発足した。日点研は教員の集まりという面をもっていた。日点研の主な目的は、教科書の表記を全部統一させたいということであった。

私は当時の日点研会長・鳥居篤治郎先生から、「日点研は解散し、全日盲研の中に点字部会をつくるように交渉してくれないか」と頼まれた。私は、「分かりました。教育界だけでなく、点字出版所や点字図書館などの社会福祉関係を含めてやってほしい。一般の図書や教科書を印刷しているところも含めて表記を統一していないと、生徒が困るでしょう」と申し上げた。鳥居先生は、「うーん、福祉は出てくれるのかなあ」とつぶやいておられた。「日本点字研究会報」(19号)に「日本点字委員会プラン」を書かせてもらい、日本点字委員会の原案を出した。

附属盲の全日盲研・清水友次郎事務局長、日点の本間一夫・下沢仁両先生、東点の肥後基一先生、大阪府盲の本間伊三郎教頭に依頼して委員を内定してもらい、1966年(昭和41)7月、松山で開かれた全日盲研の前日、日点研の解散と日本点字委員会の発足、そして点字部会の常設を決めてもらった。その前に全日盲研の事務局が附属盲学校にあって、清水友次郎先生ー私の担任だったーが「引き受けるよ」ということで、点字部会がすぐにできた。松山大会のときも、満場一致でできた。そういう意味で、一種の生みの親というか、産婆役をやった。

そのとき、『点字文法』(1959)の改訂作業を進めるということで、関東からは阿佐博先生と私の二人が出て、一緒に議論をして、『点字文法(点字国語表記法)』(1968)を出した。私としては国語の点字なのだから「国語点字表記法」がいいのではないかと、ということで、そういう書名にして出した。

ちょうどそれが、日点委のできたときである。鳥居先生に「日点委ですぐに本を出されると、『国語点字表記法』が売れなくなるからなあ」と言われた。みんなからは「日点委をつくるだけつくっておいて、本を出すのを延長したら、いつやるんだ」と言われたが、諸事情により、しばらく委員会ができなかった。

その頃、田中徹二さんが、日点、東点、点毎、日点研の表記の違いを調査し、「新時代」に発表した。それを叩き台にして調整をしよう、ということをやった。

1971年(昭和46)、岩手の盲学校で全日盲研があり、そこで点字部会が初めてもたれた。その中で大きなことが三つあった。

(1) 附属盲学校の尾関育三先生が、イギリスにならって小数点を②の点、位取り点を③の点にするという提案をした。

(2) 川上泰一先生が、漢点字を公に発表された。

(3) 永井昌彦先生が点字を初歩者に教えるときには、まず最初に左側の縦方向①②③の点から成る文をつくる。「アニワ□イナイ」「イワアナニワ□ワニワ□イナイ」などである。これから入ると教えやすい、ということであった。私はそれを基にして、マスの後半に、例えば④の点を足して、「オヤネノ□ウエノ□イヌ」のような形でやっていった。その後、長谷川貞夫先生が六点漢字を考案されて、川上先生の八点漢点字と両方できた。それに対して、「私のは半マス点字だ」ということを言っていた。この方法は文部科学省から発行されている『点字学習指導の手引き』の中で紹介されている。永井先生の議論が、点字の指導法のきっかけとなったのである。

1970年(昭和45)7月、第2回委員総会を開き、田中さんの論文を叩き台に統一を図ることに努めた。田中さん、尾関さんをオブザーバーとして招いた。

そのときは、「ウチのこれを譲るから、あんたのほうのそれを譲りなさい」といった、政治的な取り引きのようなものもあった。1971年(昭和46)3月、『日本点字表記法(現代語篇)』が発行された。

次の『改訂日本点字表記法』を1980年(昭和55)2月に出した。基本的には「意味」と「関係」という、2つの考え方を出した。

その後90年版で、拍数のことを入れたのは、和語とか漢語とか言っていると、いろいろ難しいから、ということからであった。しかし用例の中にあった「水栽培」から、和語は続ける、漢語は切るということで、『点字表記辞典』の「味噌ラーメン」と「塩ラーメン」に差が出てきた。これで、あっちから、こっちから問題が起こった。

話は現代語篇に戻るが、文末の句点について、下沢先生は「文末の二マスあけに慣れている人に普及するだろうから、しばらく二マスあけにしたほうがいい」と言われて、二マスあけにした。イギリスの点字には大文字符を使わないから、ひとマスではかなり詰まった感じがする。アメリカの点字は、大文字符で始まるから、文末のピリオドのあと、ひとマス半あけということで、それなら楽に読める。ということで、このへんで妥協しよう、ということがあった。

90年版で読点の使用を本格的に認めたとき、点毎の読者欄で「くたばれ、日点委」などと古い読者から目のかたきにされた。「日点委を続けるなら、体を鍛えておこう」といった冗談を言ったりしていた。



関東地区の委員会のあともそうだが、2次会の飲み会でも点字の話を酒のさかんにして話す。点字が頭から離れない人をテンキチと言っていた。総会ときには夜遅くまでやり、12時過ぎると、「もうシンデレラ・タイムだ」といって帰る人もいるが、何人かが残って、夜、大激論をする。翌日の総会では、前の晩にみんな言いたいことを言っているから、すうーと通る。「日本の点字は夜つくられる」という風評が出てきたりした。

印象に深いことがある。「1990年版」を出したのは、ちょうど、日本点字制定100周年であった。記念切手を出してもらおうと、郵政省と交渉した。郵政省より、「1890年（明治23）、日本の点字が制定されたというが、その年の官報に載っていない。100周年というのは、たかが一つの盲学校で決まっただけではないか。」という質問があった。それに対して、「官立東京盲啞学校において決定したということは、当時においては、文部省が決定したことと同じような位置づけがあった」ことを説明して、やっと納得してもらい、100周年の記念切手を出してもらった。遅れて明治34年（1901）の官報に、石川倉次案が「日本訓盲点字」として発表された。

お役人というのは、「官報」を信じる。「官報」に載っていないことは決定とは認めない、ということである。「官報」は遅れて出た。そういうことがあった。

もう一つ、印象に残っているのは、国語審議会において「現代かなづかい」の改訂の議論が進んでいたときに日点委が出した意見書の結果を、文化庁の調査官のところに聞きに行ったときのことである。それについて「日本文藝家協会から歴史的仮名遣いに戻せという意見書が出たが、それに対して、もっと表音式にしろという日点委からの要望だったので、ちょうど相打ちになって、おかげさまで、戦後の『現代かなづかい』とそれほど変わらずにすんだ」と言われた。

現在、私は公職選挙法に載っている点字一覧表の不備について改訂を検討している。また「点字は文字とみなす」という文言があるが、これは点字を文字とは別の物であるが、認めてやろうということである。それについても様子を見ながらきちんとした案として提出するつもりである。

以上

# 点字とJISとISO

日本点字委員会委員

日本点字図書館 和田 勉

点字の講習会などで教える側に立ったとき、話の枕に駅や身近な製品に点字があることを紹介する人は多いだろう。ここ数年、にわかに関数が増えてきた子ども向けに点字を教える本などにも、私たちの身のまわりにある点字が写真と共に紹介されていることが多い。だが、そのような街中の点字や、身のまわりの製品に付けられた点字に、日本工業規格(JIS)が深く関わっていることは、あまり知られていないと感じる。

実際、これまで「日本の点字」では、点字の規格化・標準化に関する記事が掲載されてこなかった。今回、触知案内図の国際規格が世界標準化機構(ISO)から発行されたことについて書く機会をいただいたので、少し古いところから話を始めたいと思う。

## JISまでの道のり

公共施設に点字表示が付き始めたのはいつ頃からか？ 盲学校や点字図書館などの専門施設については、当然古くからあっただろうが、不特定多数の人がアクセスする駅や市役所などの公共的な施設等への導入は、1960年代の終わりから1970年代初め頃と考えるのが妥当だろう。この頃は、点字ブロックの発明もあり、福祉のまちづくりへの関心が徐々に高まってきた時期である。中でも点字表示普及の大きな契機となったのは、1967年に当時の国鉄(現 JR)が近距離乗車券発行用自動券売機を全面的に導入したことだと考える。つまり、これまで視覚障害があっても窓口で購入できた切符が機械でなければ買えなくなった。今後は、ボタンの識別のために点字の表示が必要になったということである。その後、1973年の福祉元年、1980年代の国連障害者の十年という契機を得て、街中の点字表示はあつ<sup>まちなか</sup>という間に増えてきた。

1990年代に入ると、国や市区町村などの規則やガイドラインが、しっかり整備されるようになり、公共的な建物には点字や触知案内図を設置しなければならないような状況が訪れた。それまでは、福祉課などから点字図書館や盲学校などに、いちいち相談していた状況があったが、作ることが規則になってしまうと、数も増える。一々相談などしては仕事が進まない、ゼネコンが一括で受けて墨字も点字も同じ業者

が請け負うようになってきた。こうした業者は屋外看板を主に手がけるため、サイン業者と呼ばれていたことから、点字サインという言葉も生まれた。筆者が、点字サインの仕事に関わるようになったのは、この頃だが、当時は、点字の大きさを教えて欲しいという業者からの電話が、しょっちゅうかかってきたことを覚えている。

そうした問い合わせ対応として、よく紹介したのが「日本の点字 第23号」であった。当時、点字のサイズを分かりやすい数値として示していたのは、この号に掲載の「点字のサイズと手触り」(木塚泰弘) ぐらいしかなかったとも言える。

しかし、点字の大きさだけを教えてくれなどという業者が正しい表記の点字を書けるわけがない。1990年代の終わり頃には、街中の点字表示は、間違っていないもののほうが少ないぐらいの状況になってきた。中でも傑作だったのは両国駅の階段手すりで、付近の横網という町名を点字でヨコヅナと書いてあったことである。この誤表記などを事例として挙げた筆者のレポート「街で見かける点字サインーその問題点」が、雑誌「視覚障害」No. 161に掲載されたのが1999年。折しも日比谷公園に新しい触知案内図が設置されたことを取材に来た読売新聞の記者に、この原稿を紹介したところ、こちらのほうが面白いと持ち帰られた。地方版の片隅にでも載るだろうかと思っていたところ朝刊1面に掲載されたのには驚いた。点字の仕事をやっている全国紙の1面に名前が載ることに不思議な感じがあったものである。

ちなみに、この号の「視覚障害」は早々に完売し、発行元に許可を得て、抜き刷り版を作らせていただいた。日点の用具ショップでも一時期取り扱っていたが、点字サインに関わる業者さんが買い込んで、営業の際に配って回ったという話も聞いたことがある。

この記事が出て以降、点字サインの仕事で監修を求められることが増えてきた。日点以外にも同様の依頼が進んだようで、日盲社協の出版部会で、これを大きなテーマとして取りあげることになり、2000年4月に点字サインワーキンググループを発足させた。委員は、当時京都ライトハウスの点字出版部の所長だった田中正和氏、名古屋

点字サイン誤表示を伝える紙面



ライトハウスの小川真美子氏(2001年2月から)、日本ライトハウス点字情報技術センターの福井哲也氏と堀江豊治氏、そして筆者の5名で、2002年に『視覚障害者の安全で円滑な行動を支援するための点字表示等に関するガイドライン』(以下、点字サインガイドライン)を発行した。発行に先だって、2001年に視覚障害者209名にアンケートを行った。今でも、この結果を根拠に説明することがあるが、その成果の一つに操作ボタンと点字の位置関係を決める根拠ができたことが大きいと考える。例えば、当時のボタン式券売機に付ける点字について、ボタンの上に表示しているもの、下に表示しているもの、両方があり、どちらがオススメかを言えるようになったのである。

幸い、この『点字サインガイドライン』の評判が良かったため、これを JIS にしようという動きが出てきた。声かけは、共用品推進機構の星川安之専務からいただいた。丁度、国のほうで、高齢者・障害者に配慮した規格を作っていこうという動きがあり、それにうまく乗った形で、JIS 作りが進むことになった。

『点字サインガイドライン』は、点字表示と触知案内図の両方の内容を扱っていたが、JIS は2つの規格に分けることになった。原案作成委員には、大学の先生、点字サインの製作者、設置事業者に加え、点字の専門家も集まった。日点委からの選出ではないが、それぞれの原案作成委員には、木塚泰弘氏、高橋秀治氏、田中徹二氏、當山啓氏などの名前が見える。また、親委員会である高齢者・障害者支援専門委員会には、加藤俊和氏がいらした。筆者も触知案内図のほうの委員に加わることになった。

点字表示の JIS は2年間の、触知案内図の JIS は3年間の審議期間を経て、2006年に『障害者・高齢者配慮設計指針—点字の表示原則及び点字表示方法—公共施設・設備 JIS T0921』(以下、点字表示 JIS)、2007年に『障害者・高齢者配慮設計指針—触知案内図の情報内容及び形状並びにその表示方法 JIS T0922』(以下、触知案内図 JIS)が発行された。

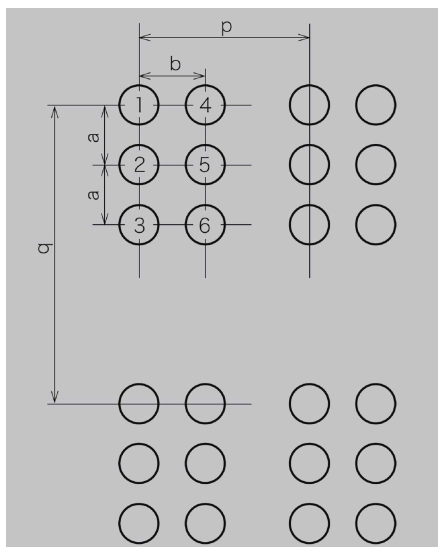
点字に関する JIS としては、そのほか、『紫外線硬化樹脂インキ点字—品質及び試験方法 JIS T9253』(2004)、『障害者・高齢者配慮設計指針—包装・容器—触覚識別表示 JIS S0022-3』(2007)、『障害者・高齢者配慮設計指針—点字の表示原則及び点字表示方法—消費生活製品の操作部 JIS T0923』(2009)がある。

## JISの概要

ここで、JIS の概要について、簡単にふれておきたい。

その功績は、いくつもあるが、何よりも点字サイズを規定したことにあると考えている。前述したように、点字サインの広がりと共に、点字関係者には「点字の大きさを教えて欲しい」という業者からの質問が頻繁に舞い込んでいた。そうした質問に、「日本の点字 第23号」の存在を回答していたことは既に述べたが、国の規格としての数値があると言えるのは迫力が違う。さらに、点字表記についても『日本点字表記法』最新版に従う」などの記載を盛り込んだため、分ち書きの誤りを JIS 不適合と指摘できるようになったことも大きい。

ところで、JIS の点字寸法が規格によって異なることを伝えておきたい。前述の JIS のうち、『紫外線硬化樹脂インキ点字—品質及び試験方法 JIS T9253』の数値だけが他と異なっている。この JIS は点字の寸法を初めて規定した記念すべき規格なのだが、成り立ちが他と異なり、点字サインの業界団体が定めたものだった。増加する点字サインの中でも、新たな技術である UV 点字は、さまざまな業者が参入してくるようになっていたが、点の高さが低かったり、点がぼろぼろ取れてしまうものがあったりと粗悪なものが目立つようになっていた。日点と関わりを持つような業者は、質の高いものを作っていたが、その分手間をかけており、コストの面で競争見積に負けてしまうということがあり、真面目に作っているものが損をする状況になりつつあった。そこで、業界として質を定めて競争を公平にしようという考えである。この JIS は、点字表示 JIS よりも先行して進められ、当初は TR(テクニカルレポート)という形で公表された。この JIS の点字寸法は、パーキンスタイプライターの点字サイズをお手本



単位 mm	
中心間の場所	中心間距離
a (1-2 点間)	2.3±0.1
b (1-4 点間)	2.3±0.1
p (1 ますの領域・横 1-1 点間)	6.1±0.2
q (1 行の領域・縦 1-1 点間)	5a 以上

表 1 UV点字JISの規定する点字寸法

としたため、日本で通常使っている点字よりも大きく、許容範囲も狭い（表1）。

一方、点字表示 JIS を初めとする他の JIS では、日本の亜鉛版製版機で打ち出す点字サイズを認めたため最小値がさらに小さく、かつ、海外での対応を意識して、イギリスのウェブサイトに掲載されていた最大サイズまで含めるようにしている。要するに、数値の幅が広いのである（表2）。そのため、点間寸法とマス間寸法のバランスに配慮するよう求める規定もある。

JIS に UV 点字用と点字表示用の2種類の寸法規定があることで、どちらのサイズがオススメかを問われることがあるが、基本的には前者を教えることが多い。公共的な場所に表示される場合には、やや大きめで、マス間も広いほうが良いと考えるからだ。与えられた寸法が狭い場合には、やや小さめのサイズもありますよと、奥の手として紹介している。

点字表示 JIS では、手すりの点字表示方法について、詳しく規定していることも特徴と言えるだろう。主なものを以下に挙げる。

- ・一つの手すりに書いて良い点字は3行まで
- ・1行の点字は40マスまで
- ・行き先の情報を表す場合、行頭に矢印を書いてから行き先地を書く

その他、前述したボタンと点字の位置関係や、設置位置などについての規定も、この JIS には記載されている。

触知案内図 JIS は、その名称から説明しよう。「触図」でも「触地図」でもなく、「触知案内図」と名付けられたのは、その適用範囲を狭めるためであった。つまり、概念図や投影図なども含む何でもありの「図 = graphic」ではなく、日本地図のような「地図 = map」でもなく、建物や駅前広場などの「案内図 = guide map」に限定した規定だということを明確にしたわけである。教育現場や点字図書館が作るような図にまで影響を及ぼそうとすると、とてもではないが收拾が付かないし、触図は本来自由に作るべきであるのだが、サイン業者が作る種類の図について、最低限のルールを知ってもらいたいという意図があった。ただし、建物内に設置される種類の図が決して使いやすいわけではないことなどから、パンフレットのように持ち歩けるタイプ（JIS では

単位 mm

	中心間距離
<i>a</i>	2.2~2.5
<i>b</i>	2.0~2.5
<i>p</i>	5.1~6.3
<i>q</i>	11.0 <sup>(1)</sup> ~15.0

注<sup>(1)</sup> *a*が2.2 mm から 2.3 mm の場合に限り、*q*は10.1 mm を下限値とすることができる。

表2 点字サインJISの規定する点字寸法

冊子型と呼ぶ)についても適用することとした。

この JIS では、まず、触知案内図とは図単独の存在ではなく、a) 表題、b) 解説文、c) 凡例、d) 触知図形の 4 者で構成されるべきものと定義した。その上で、これらの望ましい位置関係を規定したり（触知図形の上または左）、最大寸法や図の向きなどについて規定している。

この JIS で最も目立つのは、標準的な触知記号を提案したことだろう。附属書(参考)という位置づけではあるが、現在地・誘導ブロック・階段・エスカレータ・改札・トイレの便器などの基本的な触知記号が掲載されている。この記号の選定のためには、2年間で3回の調査を実施した。1回目はサイン業者が使用している記号の一覧調査、2回目は蒐集した記号を絞り込むためのユーザー調査、3回目は標準化できると思われる複数の記号を図の中に落としこんで3種を比較するユーザー調査だった。3回目の調査の結果は、JIS の解説に記載されているが、JIS 掲載の記号を使った触知案内図の平均読みとり時間が、全体図で4分37秒(±3分19秒)、トイレ案内図で2分31秒(±1分45秒)であったという。これらの記号は、しかし、数値を記載することができなかった。識別や触読効率に係るサイズについての調査までは実施できなかったからである。そのため、規格票を A4サイズで刷り出した際の原寸寸法を推奨サイズとするに止めた。

その他、消費生活製品の操作部の JIS は、主に家電製品などのスイッチ部に表示する点字の略字についての規格。包装容器の触覚識別に関する JIS は、シャンプー容器のギザギザなど、点字以外の触覚識別を表示する際の注意事項を規定したものである。

なお、JIS は日本工業標準調査会のホームページから無償で閲覧が可能だ。購入したい場合には、日本規格協会のホームページから買うことができる。

## そして国際規格へ

さて、点字表示関連の JIS を含めた高齢者・障害者配慮設計指針シリーズの発行に、国として取り組む動きがあったことを先に述べた。これは、世界第一の高齢化率（国連の規定で、総人口に占める65歳以上人口の割合：日本は2015年10月1日現在26.7%）となった日本においては、身体の不自由な人にも使える設備や機器を作らなければ、モノを買ってもらえなかったり、サービスを利用してもらえないという考えから進められてきた。このシリーズの JIS には、他に、スイッチの凸点表示や、家電製品の操

作に関わる音の種類・大きさ、公共トイレの操作ボタンの配置などについて規定したものがあつた。これらの JIS は、アクセシブル・デザインと名付けられ、世界標準化機構(ISO)へ提案して、新たな規格にすることが進められてきた。この分野での標準化を日本がリードすることで、日本の製品やサービスが、国際的な市場でも影響力を持つための、国家戦略とも言える。点字 JIS は2011年、触知案内図 JIS は2013年に、国際規格への提案が行われた。

ここで、ISO への提案の仕組みを簡単に紹介しておこう。まず、ISO には、提案された規格案を審議するために、さまざまな専門委員会(Technical Committee : TC)が存在する。2016年現在、専門委員会は、TC1(ネジ)から、TC309(組織ガバナンス)までであるが、一部の TC は廃止されたり、休眠しているので、必ずしも番号通りの数があるわけではない。点字と触知案内図は、この中の TC173(福祉用具 : Assistive products for persons with disability)という専門委員会で扱われた。もっと詳しく言うと、専門委員会の下には、さらに分科委員会(Sub Committee : SC) や作業部会(Working Group : WG)がある。TC173の場合、現在活動している分科委員会は5つあるが、アクセシブル・デザインを扱う SC7が、点字・触知案内図の提案先であった。ちなみに、SC7は日本提案で新設された委員会であり、点字の規格は、SC7の最初の審議事項の一つとなつた。

次に規格発行までの流れだが、まず提案国は、分科委員会に対し、新規業務項目提案(New Work Item Proposal : NWIP)として規格原案を登録する。この提案は、SCメンバーの投票にかけられ、過半数の賛成票と、5カ国以上が専門家を派遣することを表明すると、規格発行に向けた具体的な動きが始まる。新規提案が認められた原案は、ワーキングドラフト(WD)と呼ばれ、各国の専門家らによって、投票時のコメント処理を中心とした審議が行われた後、委員会原案(Committee Draft : CD)となつて、再度投票にかけられる。この投票でメンバーの4分の3の賛成が得られると、次の段階へと進むことができるが、次は国際規格原案(Draft International Standard : DIS)として審議される。原案がまとまると、再び投票にかけられる。ここでも4分の3以上の賛成が承認要件であるが、結果が良ければ、次のステップを飛ばして、国際規格(International Standard : IS)として発行されることになる。点字表示と、触知案内図は、いずれも最終段階での賛成が多かつたため、最終段階の審議を飛ばして国際規格として発行されることになつた。点字表示の国際規格は2013年10月発行で、名称は「ISO 17049: Accessible design - Application of braille on signage, equipment and appliances」、触



知案内図の国際規格は2016年4月発行で、名称は「ISO 19028 : Accessible design - Information contents, figuration and display methods of tactile guide maps」である。日本からの専門家は、点字は青松利明氏、触知案内図は土井幸輝氏であった。

どちらの国際規格も、新規提案時は JIS の英訳としてスタートしたが、各国の議論を経て、変わったところが多い。

点字表示の国際規格で大きいのは、日本では2つに分かれていた、公共設備と消費生活製品の JIS を一つにまとめたことである。また、点字の高さの最大値も JIS より若干大きく、さらに、JIS にはなかった点字の周囲にとるべき空白スペースとして、6 mm 余白をとることが規定された(表3)。

Dimensions in millimetres		
Parameters	Description	Distance between dot centres
<i>a</i>	Vertical dot spacing (spacing between dot 1 and dot 2)	2,2 to 2,8
<i>b</i>	Horizontal dot spacing (spacing between dot 1 and dot 4)	2,0 to 2,8
<i>p</i>	Cell spacing (spacing between dot 1 and dot 1')	5,1 to 6,8
<i>q</i>	Line spacing (spacing between dot 1 and dot 1'')	10,0 to 15,0

表3 ISO規格が規定する点字寸法

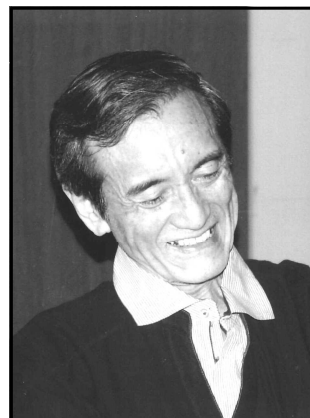
触知案内図の国際規格では審議の中で、ドイツの視覚障害委員から真空成型方法による触地図作成の規定内容を盛り込むことを強く求められるなど、日本勢は苦労が絶えなかったようだ。結果として、大きな構成は変わらなかったが、一部に反映されたため、ボリュームが増えている。また、附属書には、日本の触知記号と同列で、ドイツとスウェーデンの触知記号が掲載されている。

国際規格発行後、今度は国内規格の修正作業が始まっている。点字表示 JIS は、2015年度、改訂作業が進められ、消費生活製品の JIS と統合されることになった。国際規格で採用された点字の余白に関する規定も反映されている。この改訂 JIS は、早ければ2016年度内に発行されるだろう。その後、触知案内図 JIS の修正作業が進められる筈である。いずれも、国際規格を参照しつつ、国内の事情を反映した新たな JIS が登場するであろう。この15年近く、縁あって、国内規格・国際規格の両方の作成に関わることができた。多くの人が、手弁当に近い働きで関わっていることを知ることができた。これも点字が与えてくれた縁だと思うと、感慨深いものがある。

## 特集「当山啓さんを偲んで」

前事務局長・当山啓さんが2016年5月20日に逝去しました。享年68。当山さんは2002年度から亡くなるまで事務局長を務めていました。

ここに当山さんをしのいで、日点委会長・木塚泰弘さん、長年、日本点字図書館で同僚であった、会友・植村信也さん、および日点委副会長・金子昭さんに執筆をお願いしました。



### 故当山啓氏略歴

1947年(昭22) 5月22日生まれ

1960年(昭35) 3月 豊橋市立岩西小学校卒業

1963年(昭38) 3月 豊橋市立豊岡中学校卒業

1966年(昭41) 3月 愛知県立豊橋東高等学校卒業

1970年(昭45) 3月 玉川大学文学部教育学科卒業

### 日本点字図書館関係

1970年(昭45) 4月 総務部庶務係採用

その後、総務部庶務係主任、出版部製版係（出版部長付主任）、点字部点訳者養成係主任、出版事業部出版課長、図書製作部長、副館長を歴任。

2008年(平20) 3月 定年退職

2008年(平20) 4月 図書製作部点字製作課非常勤職員採用

### 日本点字委員会関係

1972年(昭47) 事務局担当委員

1990年(平2) 盲人社会福祉界代表委員

2002年(平14) 事務局長

## 受賞歴

1980年(昭55) 日本盲人社会福祉施設協議会永年勤続表彰

2005年(平17) 東京都社会福祉施設・団体永年勤続者感謝状

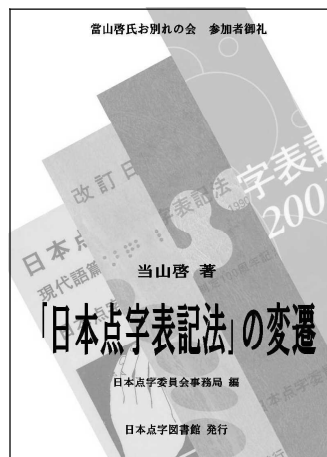
2013年(平25) ヘレンケラー・サリバン賞

## 主な著書

『(決定版) 点字・点訳基本入門』(二期出版 1998年)

『(改訂版) 点字・点訳基本入門』(産学社 2002年)

『「日本点字表記法」の変遷』(日本点字図書館 2016年) ※当山啓氏お別れの会で配布した冊子 希望の方に、PDF 版・点字データ版をお送りします。事務局までお申し込みください。



## 当山さんをしのんで

日本点字委員会会長 木塚 泰弘

当山さんは、能見さんの血液型人間学に凝っていて、ことあるごとに自分はB型だということを強調していましたが、同じB型としての仲間意識がありました。さらに、当山さんは、私と一回り違うイノシシで団塊の世代でした。かつて、副会長をしておられた小林一弘さんもB型のイノシシだったので、一時期の日本点字委員会では、推進役の会長・副会長・事務局長が、全員B型のイノシシ年だったということになります。当山さんが亡くなられたのが5月ということにも、因縁めいたものを感じます。当山さんも私も、共に5月生まれだったからです。

そんな当山さんと、最初に親しくなったのは、点字カセットシステム開発研究会が立ち上がったときです。カセットシステムと言っても、点字をコンピュータで処理して、カセットテープの中に記録しようという意味で、実際にはパソコン・システムです。このプロジェクトでは、東京工業大学の長谷川健介先生や芝浦工業大学の入江正俊先生の指導のもと、自動点字読み取り装置と自動点字製版機を開発しました。最初は読み取り装置のブレイルマスターが製品化されましたが、自動製版機は、長らく開

発を続け、実用機としてブレイル・シャトルという、表面と裏面を連続で打ち出せる機械を作りあげました。A4判でも打てる機能や、マス間隔を自由に調整できる機能がありました。まだ富士通の8ビット機の時でしたが、当山さんは、この古いパソコンを日点でずっと使い続けていたそうです。

当山さんは一つのことにのめり込んで頑張るほうでした。点字についてもそうでした。仕事でも、ボランティアでも、もちろん日点委の事務局長としても、点字に熱心な点字人間でした。昔、日点委には、お酒を飲んでも点字の話しかしない、酒の肴は点字だという人間ばかりいましたが、当山さんはそれとはちょっと違って、音楽や読書、その他の幅広い教養で皆と楽しく飲むというタイプでした。

お酒は大好きでした。手術をして戻ってくると、最初は「ビールくらいはちょっと…」と言いながら飲み始め、だんだん焼酎に変わってくるということがありました。そんなことを繰り返し、最後は日点委の今年度総会の決算報告と事業計画の原案を持ってきて、帰りに「明日は精密検査だから、今日は飲むのをやめるよ」と言って帰って行きました。それから1週間後に亡くなったのです。

当山さんは事務局長として日点委の推進役の一人でした。たとえば言えば、キャッチャーであり、ゴールキーパーでした。

その役割を今度は新しい事務局長がこなしていくということになると思います。ただ何もかも新しい事務局長に頼ることなく、日点委のすべての人たちが、みんな楽しく協力し合いながら、仕事を進めていきたいと思っています。当山さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 当山さんのこと・思い出すままに・少々

日本点字委員会会友 植村 信也

私が日点で働くようになったのが1982年、当山さんとはそれ以来約32年の付き合いでした。当時の日点製版室は玄関を入れてすぐ右側で、部屋の奥に小さなスペースが5つあり、それが製版室でした。当山さんは一番左端、足踏み式の製版機を使っていました。リズムカルにペダルを踏みキーを叩いている姿を目の前にして新米はただ圧倒されるばかりでした。

足踏み式と電動式製版機（小林鉄工所製）が当時日点で使っていたものですが、当山さんは時にパーキンス製の足踏み式製版機もこなしていました。手打ちでインターポイントが打てる点もきれいなものでした。その大きな機械を自由自在に操っていた姿も思い出されます。自分も当山さんのようになりたい、と思ったのもこんな時からでした。

クラシック音楽好きということが共通していました。特にマーラーが好みということもあって、それは夢中になって聴いたり話したりしたものです。終業後 CD を聴きながらそれこそ時間も忘れてしまい、気が付いたら終電車ということも何度もありました。日毎いろいろな曲を聴いていましたが、マーラー以外の作曲家で今特に思い出されるのはチャイコフスキー、特に交響曲第 6 番「悲愴」です。それもフリッチャイ指揮・ベルリン放送交響楽団の 6 番、うねるような音の流れに浸りながら「スッゲー、サイコー」と何度ため息ともつかぬ言葉を発し合ったことか。

日点に入って数年後に製版方式が電算化され始めますが、これは当山さんがいなければ間違いなく進展しなかったことです。ブレイル・シャトル 0 号機から 1・2 号機と搬入され、入出力がスピードアップされていったあの頃の高揚感も懐かしい限りです。

その後新しい製版機も何台か入っていますが、毎日フル回転して動かす機械は当然あちこちトラブル続きです。機械の構造を心得ていた当山さんに修理が一手に回されたのも必然。当山さんがいるから安心、トラブルがあっても大丈夫と私たちはなんとも甘えきっていました。

アルコールも実によく飲みました。終電に間に合わず、当山宅に泊めてもらったことも（2回）。奥さんの真理さんに多大な迷惑をかけたのは当然、今更ながらにとんでもないことばかりしていたわが身を恥ずかしくおもいます。真理さんすみませんでした。

当山さんは恩を売らない人でもありました。恩を売られなかった者がこんなことを言うのは実に凶々しい限りですが、周囲と比較するほどにそれは確信に近づいていきました。「清々しく美しい」ひと。自分も恩を売らないようにしようと決意したのは、そんな当山さんと接していたからです。

私たち製版室の連中は、わからないことがあると必ずと言っていいほど当山さんの判断を仰いだことでした。丁寧に答え、説明もしてくれたこと。当山さんが言っていたのだから間違いなし、としていたこと。これもまた甘えきっていたことの証左。

ただし、ルールに幅があるような場合、自分ならこうするとした上で、それでもあなたが考えて決めた方がいいんじゃないか、というような言い方をよくしていました。決して自分の考えを押し付けるようなことはなく、各自の判断を尊重してくれていました。ルールブックが全てではなく、常に自分で考え判断してこそ点訳の面白みがあるというスタンスでした。

点字は勿論のこと、とにかく仕事が好きだった当山さん、クラシック音楽が好きで音をバックに点訳を進める当山さん、そこにアルコールが入れば更に快調に。そんな光景が目には浮かぶようです。点訳は読みやすく、隅々まで注意の行き届いたものでした。

今そんな当山さんの遺した諸々を前にして思います。点字・点訳のことをもっと学習しよう、仕事も心を込めて一生懸命やろう。

当山さんと一緒に仕事等やれたことは私の宝物、誇りです。

## 当山啓さんを送る

日本点字委員会副会長 金子 昭

日本の点字をつくりあげるのに貴重な役割を果たした多くの功労者がおられます。またその中の一人を、私たちは失いました。点字の世界で後に続く人たちが先達の遺志を受け継いでいく—そうしたリレーが、これからも続いていくことでしょう。当山啓さんをしのんで一文を書きたいと思います。

以前、<sup>とおやまひらく</sup>遠山啓さんという、水道方式で有名な数学者がおられました。教育の全体をどう変えていくかをテーマに、雑誌「ひと」を発行したことで知られていました。私が学校に勤めていたころ、職員室で日点に、「トーヤマ ヒラクさん、おられますか」などと電話をしました。終わると、「金子さん、あんたずいぶん偉い人と知り合いなんだなあ」などとからかわれました(尊敬されました?)。有名人と同姓同名というのは、どういうお気持ちなのでしょう。

当山さんはよくご自分のお名前のことを話題にされました。「〈とうやま〉の〈とう〉は掃除当番の〈当〉。本当はもっと難しい字を書くんですけどね…。〈ひらく〉は拝啓の〈啓〉。といっても、最近の若い人は手紙をあまり書かないから、それでは

分からない。谷啓(たにけい)の〈啓〉というのと、もっと分からなくなる…」などと、みんなを笑わせていました。

あるときこんなことを言われました。「娘がまだ小学生だったころ、友達から言われたそうです。『あなた、〈とうやま〉って書いているけど、本当は〈とおやま〉じゃないの?』って」。点字をやっている人は、こんな話題が大好きですから、すぐにそれで盛り上がりました。「仮名遣いに〈とう〉と〈とお〉の区別があるなんて、点字をやって初めて知った。その友達は、点字もやらないのにそんな区別のあることをよく知っていたね」などという、「小学生のとき、何聞いてたんじゃい!」とつつこみを入れたくなるような人までいました。

当山さんの点字の博識については、よく知られていました。以前、筆者が『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで—』(日本点字委員会 2007)をまとめたときのことです。多くの施設のお世話になりましたが、その一つとして日本点字図書館の資料室やレファレンス担当の方の手をわずらわせました。いくつかの資料についてお尋ねすると、「ああ、これは当山さんなら知っているかもしれない」と何人かの方が言われました。当山さんの点字についての博識は、日点の中でも多くの人が承知していたことなのだ、と知りました。

そうした当山さんの点字の知識は、『(決定版)点字・点訳基本入門』(二期出版1998)、『(改訂版)点字・点訳基本入門』(産学社 2002)、『日本点字表記法の変遷』(日本点字図書館 2016)などに結実しました。『点字・点訳基本入門』は、発行以来のロングセラーとなり、今も入門書として広く読まれています。また蔵書検索すると、多くの公共図書館で所蔵しているようです。『「日本点字表記法」の変遷』は、2016年7月9日、日本点字図書館で行われた「お別れの会」において参加者に配布されたものです。

日本点字委員会がこれまで発行した「現代語篇」から「2001年版」に至る4冊の表記法について、「分ち書き」「読点・中点」「囲みの記号」などの項目ごとに、多岐にわたってその異同をまとめたもので、各版で、どこに修正が加えられたかが解説されています。元々は、日点の点字製作課で2006年から08年にかけて開かれた内部の勉強会のために、当山さんが執筆したものです。また当山さんは、「点字出版物製作基準」「点訳のてびき」「点字表記辞典」などの編集にも携わりました。

お別れの会で当山さんに語りかけた方々の中のお一人、<sup>たけうちつねゆき</sup>竹内恒之さんは、自著『み

な子のねがい』の中で、当山さんを登場させていることを紹介されました。竹内恒之作、山中冬児やまなかふゆじ絵、偕成社、1986という本です。

6年生の元気な男の子・賢治が電車の中で、盲学校の小学部5年生の女の子・みな子にぶつかって点字の本を飛ばしてしまう。それが縁で友達になります。みな子を賢治の家に招いて、みな子から点字本を見せてもらったりしながら、歩行、読書など目の不自由な人の生活のことを学んでいきます。

賢治は点字について興味を持ち、日本点字図書館に通っていろいろなことを教えてもらいます。そこに「目のギョロツとしたおじさん、点字の本を作っている当間さん」が登場します。当山さんのことです。「当間のおじさんは、大きな目と大きな声からの印象とは反対に、とてもしんせつだった」とあります。「当間のおじさん」から目の不自由な人の歩行のこと、点字の本がとても少ないこと、国語辞典を点字本にすると50巻にもなってしまうことなど、目の不自由な人のことを教えてもらいます。みな子のねがいは「もっともっとたくさん本がほしいわ。わたしたちの読む本が…」ということです。賢治は心の中で叫びました。「本は、そして読書は、だれにとっても平等であるはずだ！」と。

当山さん、最期まで愛する点字のことばかり思い続けておられ、病床においても日点委の総会の書類のチェックをなさっていたと伺いました。日点委のことは、心残りだったでしょう。でもご安心ください。今は、和田勉さんという事務局長が事務局の仕事を引き継いでおられます。天国の安楽椅子で、タバコをくゆらせ、大好きなマーラーを聴きながらご休息ください。さようなら。



## 点字関係文献目録 (その16)

2015年3月から2016年8月までに刊行された点字に関する単行本や小冊子、各種論文、関係資料、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害—その研究と情報—」(No. 316~328)等に掲載された点字関係の文献を集録しました。

### 単行本・小冊子等

- 長江まゆみ著 『点字に役立つ国語 増補改訂版』 日本点字技能師協会 2015年6月
- 日本点字委員会編 『日本における英語点字の表記について』 日本点字委員会 2015年9月
- 本間記念室委員会 『本間一夫と日本盲人図書館 本間一夫生誕百年記念出版』 日本点字図書館 2015年10月
- 福井哲也著 『英語点字スーパー縮約辞典 UEB & EBAE 対応版』 日本ライトハウス 2015年11月
- 東京点字出版所編集部編 『統一英語点字の書き方』 東京点字出版所 2015年11月
- 金子昭監修・迎<sup>むかい</sup>夏生<sup>なつみ</sup>漫画 『レイ・ブライユ』 ポプラ社 2015年12月
- 飯島みや子著 『花の水曜日—点訳と誘導のボランティア五十五年の記録—』 疾風怒濤社 2015年12月
- 長岡英司・田中直子著 『数学&情報処理点訳ガイド』 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部(視覚障害部門) 2015年12月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第40号』(点字と私 日本における英語点字の表記について 小学校の教科書で点字はどう扱われているか 図書紹介 点字関係文献目録〔その16〕等) 2015年12月
- むつぼしプロジェクト編・中村満紀男監修 『むつぼしのひかり墨字訳 第1集』 桜雲会 2016年2月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第16回)の正答と解説』 日本点字技能師協会 2016年4月
- 當山啓著・日本点字委員会事務局編 『「日本点字表記法」の変遷』 日本点字図書館 2016年7月

高橋昌巳監修・こどもくらぶ編 『ルイ・ブライユと点字をつくった人びと』 岩崎書店 2016年7月

新井隆広まんが・広瀬浩二郎ストーリー協力・大内進監修 『ルイ・ブライユ点字を発明した19世紀のフランス人』 小学館 2016年8月

### 研究誌等の論文

川上昇吾 本間一夫と日点図書館 「視覚障害」 No. 331 2015年12月

荻原久美子 全日盲研授業実践報告 点字習得を目指す幼児の手指操作や触覚的認知能力を高めるための支援の在り方：個別指導「つくしタイム」の取組を通して 「視覚障害」 No. 331 2015年12月

新阜義弘 新しい二つの点字雑誌の発刊から点字情報の価値を問う事業の取り組み 「視覚障害」 No. 333 2016年2月

星野敏康 点訳者に支えられた活躍 仙台と大阪で講演会 「視覚障害」 No. 335 2016年4月

武井俊彦 日本点字委員会創立50周年記念 特別講演会レポート 「視覚障害」 No. 338 2016年7月

40年史編集WG 家電製品における点字表示に関する調査研究 家電製品協会の歩みー創立40周年記念誌 家電製品協会 2015年3月

田中徹二 文学やアートにおける日本の文化史 盲人用文字の変遷 ノーマライゼーション：障害者の福祉 35(4) 日本障害者リハビリテーション協会 2015年4月  
グラフィック社編集部編 「エンボス加工」としての点字印刷のすごさに着目した“コタコタ”プロジェクト、「点字」というエンボス加工 デザインのひきだし25 特集 紙の加工大全 グラフィック社 2015年6月

原田早苗 古文の点字表記について 視覚障害教育ブックレット No. 30 ジアース教育新社 2016年1月

原田早苗 古文の点字表記についてー仮名遣いー 視覚障害教育ブックレット No. 31 ジアース教育新社 2016年7月

羽山慎亮、中野真樹 語種比率・品詞比率からみた現代点字新聞と近代点字新聞の語彙的特徴 日本語の研究 11(4) 日本語学会 2015年10月

佐藤千秋 点字の点読み取りに関する研究：触知覚活用と視覚触知覚活用における

- 学習効果の比較 第41回 感覚代行シンポジウム 感覚代行研究会 2015年12月
- 西村崇宏、土井幸輝、梅沢侑実、松森ハルミ、藤本浩志、和田勉 サイズ可変点字印刷システムを用いたマス間隔比が紙点字の触読性に及ぼす影響の評価 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 43 国立特別支援教育総合研究所 2016年3月
- 中村雅也 障害者が教員になることを阻む社会的障壁：教員採用試験を点字受験した視覚障害教員の語りから 立命館人間科学研究 34 立命館大学人間科学研究所 2016年7月
- 柳田友和 重度視覚障害者の就労場面における点字の活用に関する研究 筑波技術大学 修士（情報保障学）学位論文 2016年3月
- 河住有希子、秋元美晴、藤田恵、北川幸子、浅野有里 視覚に障害をもつ日本語学習者の学びを支援するネットワークの構築にむけた基礎調査 日本語教育方法研究会誌 22(2) 日本語教育方法研究会 2015年9月
- 河住有希子、浅野有里、藤田恵、北川幸子、秋元美晴 日本語教育におけるインクルーシブ教育の実現に向けた一授業の提案：点字五十音図を素材として 日本語教育方法研究会誌 22(3) 日本語教育方法研究会 2016年3月
- 高岡裕、関口篤史、関口紗代、梅田由紀恵、前田英一、池上峰子、松浦正子、菅野亜紀 視覚障害の患者向け点字用文章表現への自動変換の研究 日本クリニカルパス学会誌18(1) 日本クリニカルパス学会 2016年
- 大田美香、小田剛、喜多伸一、前田英一、菅野亜紀、高岡裕 中途視覚障害者向け点字 e-ラーニングの研究開発とその学習効果 神戸常盤大学紀要9 神戸常盤大学 2016年3月
- 元木章博、畑中大吾、伊藤和彦、黒川萌香、柳澤靖夫 問題推薦機能を活用した点字学習支援システムの開発と評価 電子情報通信学会技術研究報告 115(491) 電子情報通信学会 2016年3月
- 伊藤和彦、畑中大吾、元木章博 自由記述文を用いた点字学習支援システムの開発と評価 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ大会講演論文集 2016年\_基礎・境界 一般社団法人電子情報通信学会 2016年3月
- 牛田啓太、藤田走真、長谷川貞夫 点字一筆式入力 IPPITSU(イツピツ)を用いた小型タッチパネル向け入力ソフトウェアの実装 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ大会講演論文集 2016年\_基礎・境界 一般社団法人電子情報通信学会 2016年3月

- 田島彰規、佐々木信之、原川哲美、大墳聡 形状記憶素子の2点式体表点字の読み取り特性 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ大会講演論文集 2016年\_基礎・境界 一般社団法人電子情報通信学会 2016年3月
- 伊藤夏海、小出昌二 公共における触知案内図と触知記号の有効性に関する考察 日本デザイン学会研究発表大会概要集 63 日本デザイン学会 2016年
- 豊田航、宮本涼、大内進 視覚障害受障時期の違いを想定した点図における凸状点線の高さ識別特性の評価 第41回 感覚代行シンポジウム 感覚代行研究会 2015年12月
- 橋本 孝博、渡辺 哲也 立体コピーに適した点字フォントの開発とその評価 電子情報通信学会技術研究報告(福祉情報工学)115(354) 電子情報通信学会 2015年12月
- 高木昇、守井清吾、本吉達郎 点図ディスプレイを使った視覚障害者のための作図支援システムの試作と評価 ファジィシステムシンポジウム講演論文集 31 日本知能情報ファジィ学会 2015年9月
- 土井幸輝 視覚障害児・者のための情報入手支援ツールに関する研究紹介:~紫外線硬化樹脂点字・触知図作成装置とアラミド繊維製白杖の開発~ 計測と制御 Vol. 55 No. 2 計測自動制御学会 2016年
- 松田次生 小学4年生の点字学習に関する一考察: 国語科教育から障害理解教育へ(第II部 研究論文) 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 Vol. 25 日本福祉教育・ボランティア学習学会 2015年10月
- 関場理華 列島縦断ネットワークキング 東京 かるたを通じたコミュニケーション: 点字付き百人一首: 百星の会 ノーマライゼーション: 障害者の福祉 35(11) 日本障害者リハビリテーション協会 2015年11月
- 大沢秀雄 ルイ・ブライユ生誕200年切手 切手の博物館研究紀要 第12号 2016年3月

## 日本点字委員会第52回総会並びに研究協議会報告

2016年6月4日（土）～5日（日）、日本点字図書館、および戸山サンライズにおいて第52回総会並びに研究協議会が行われた。委員19名、事務局員4名、会友5名、オブザーバー等24名、計52名の出席があった。

### (1) 委員の交替、および事務局員の委嘱について

盲人社会福祉界代表では、藤森昭委員（東京ヘレン・ケラー協会点字出版所）から小川真美子氏（名古屋ライトハウス名古屋盲人情報文化センター）に交代した。

盲教育界代表では、松尾穰司委員（青森県立盲学校）から深川亮氏（秋田県立視覚支援学校）、坂井仁美委員（愛知県立岡崎盲学校）から溝上弥生氏（愛知県立名古屋盲学校）、首藤浩委員（大阪府立視覚支援学校）から馬場洋子氏（神戸市立盲学校）にそれぞれ交替した。

(2) 「両界代表委員協議会において、事務局員の和田勉氏を新たに学識経験委員として選任した」旨の報告があった。

### 総会

(1) 和田勉委員が事務局長として推薦され、承認された。

(2) 2015年度事業・決算報告、各地域委員会報告、2016年度事業計画・予算案などが審議され承認された。

(3) 創立50年記念事業として、記念講演会の開催と記念誌の発行が承認された。

### 研究協議

#### 1. 「日本点字表記法」改訂版編集委員会からの中間報告

編集委員長より、下記の報告があった。あり方検討委員会、「表記法」検討委員会の答申をどのように表記法に具体化するか、検討を進めている。答申に含まれていないことでも編集委員会が必要と思ったことは協議・検討している。

1章は、2章～5章の全体ができてから検討する。

今回は、2章・3章を中心に中間報告を行う。

4章・5章は、原稿は作成しているが議論が深まっていない。ここでは4章のうち

の2点について議論していただきたい。

「表記法」全体の章立てについて。1章～5章は表記法の流れを変えず、現在のままと考えている。古文・漢文については、1章～5章が終わった後で検討するが、現在のところ、大きく変えるべきだという意見は出ていない。

第2章について変更案の主なポイント、および第2章（案）に基づいて報告と意見交換が行われた。促音化の抑制、ローマ数字をアラビア数字で書いてよい場合の表現、などについて意見があった。

第3章について変更案の主なポイント、および第3章（案）に基づいて報告と意見交換が行われた。接頭語や接尾語などについての用例、語種や文字数の扱い、などについて意見があった。

第4章1節 スラッシュについて説明が行われた。外国語引用符の中では「④⑤⑥ヤ」、日本文の中では「⑤⑥ヤ」、外文字符の中では「ヤ」の3種類使用している。前に続け、後ろをマスあけするようにした。

これについて、「スラッシュはあった方がよい」「前もマスあけした方がよい」などの意見があった。

4章6節 行移しについて、検討の材料として試案が示された。「行末が不自然に大きくあいて違和感を感じる時、とは何マス以上か」という問いに、提案者より「その人の感覚で感じて欲しい。1つの答えにならなければいけないわけではない」旨の発言があった。

これからの進め方について、編集委員長より下記の発言があった。

2章・3章については、この研究協議会で議論いただいたことをもとに検討し、来年、原案を提出したい。4章・5章については、来年までに原稿を完成させたい。古文・漢文についてもどうするか検討する。各地域に持ち帰って検討されたことは、編集委員会にお寄せいただきたい。

2. 文中注記符について、次のような意見交換があった。「前置きしたい場合があるのは事実だろうが、原本に忠実にする必要…という表記法の表現とは異なる理由ではないか」「前置きすることのデメリットもあり、どちらかを標準にするなら後ろ置きがよいのではないか」この件は、編集委員会の検討に反映させることとした。

3. 外字符と外国語引用符の使い分けについて、近畿点字研究会より、外字符の使用拡大を意図した具体的な提案が改めて行われた。これについて意見交換が行われ、各地域、および「表記法」編集委員会において議論することとした。

4. オブザーバー江藤昌弘氏より「表記改定に関する要望事項」について、木塚泰弘委員より「ニッテンイノ キホン ホーシン」について説明が行われた。





## 編集後記

お変わりありませんか。

日本点字委員会は、2016年7月30日に創立50年を迎えました。これまでの道のりと同様、これからも点字と点字を使うすべての人と共に歩んでいきます。これからも、日点委へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

「日本の点字・第41号」をお届けいたします。

巻頭言「点字に感謝」（ロイ・ビッシュジト氏）。ロイさんはバングラデシュから留学生として来日され、現在、滋賀県立盲学校で理療科の先生をしておられます。来日以来、生活においても、学習においても多くの困難があったことと思います。それを乗り越えることができたのは、ロイさんの持ち前のお力とがんばりがあったからだと思います。そしてそれを常に支えていたのが、ロイさんの点字への愛情と信頼であったことを教えられます。勇気の与えられた一文でした。

「日本点字委員会創立50年記念特別講演会記録」。2016年6月5日、標記の特別講演会が行われました。日点委の創立当初からかかわってこられた3人の方々の声を記録にとどめておくことには歴史的な意味もあると思い、掲載させていただきました。先達の語る日本の点字表記、日点委のこれまでの流れを知ることにより、これからのあゆみの参考にさせていただきたいと思います。

「点字と JIS と ISO」（和田勉氏）。街中の点字や身の回りの製品に付けられた点字に、日本工業規格（JIS）が深く関わっています。本稿では、その規格の概要や作成される過程が詳細に述べられています。日本の規格を国際規格へ提案する取り組みも進められています。この分野の動きを知るために貴重な資料だと思います。

点字の話題として、日本盲教育史研究会の働きとサイトワールドでの点字についての講演会について紹介します。

日本盲教育史研究会（<sup>ひきたあきお</sup>引田秋生会長）は、「盲教育史全般に関する研究および、その成果の普及を目的とする」（会則）ために、2012年発足し、現在会員数は約190名です。この会の趣旨について、会長の引田氏は次のように述べています。《特殊教育から特別支援教育へ、さらにはインクルーシブ教育へと制度が変化する中で、今、盲学校と盲教育の在り方が問われています。一方で、創立100周年を迎える盲学校が相次

ぐ中で、明治、大正、昭和期の教育史に対する関心が高まり、先人の盲教育に対する思いに学ぼうという機運が湧き起こっています。このような中で日本盲教育史研究会は発足します》(発会にあたっての会長あいさつ)。現在まで5回の研究会が開かれています。盲学校の歴史など盲教育史全般について取り上げられるのですが、毎回、点字についての基調講演や研究報告も見られます。点字が取り上げられた例を見てみたいと思います。

第1回研究会(2012年10月13日・東京)：研究報告「『六つ星の光』概観」：土居由知氏、大塚美紀氏。

第2回研究会(2013年10月19日・京都)：記念講演「視覚障害児統合教育における点字教科書保障への道」<sup>しんよんほん</sup>慎英弘氏。

第3回研究会(2014年10月11日・東京)：研究報告「視覚障害者の当事者運動史—全点協運動を中心に」山岸蒼太氏、「筑波大学附属視覚特別支援学校資料室蔵『点字尋常小学読本』の書誌について」中野真樹氏、「小西信八研究」大内進・岩崎洋二氏。

第4回研究会(2015年10月24日・京都)：記念講演「日本の視覚障害者を支え続けた点字出版と点字図書館」加藤俊和氏。研究報告「中村京太郎と普選—昭和3年の『点字大阪毎日』によるアンケート調査を中心に」森田昭二氏。

第5回研究会(2016年8月28日・東京)：研究報告「『むつぼしのひかり墨字訳第一集』出版とそこからわかること」土居由知氏・岩崎洋二氏、「昭和初期における箏曲の点字記譜法の特徴—筑波大学附属視覚特別支援学校資料室蔵『宮城道雄作曲集』を例として」村山佳寿子氏、「楽善会と凸字聖書」山口崇氏。

第11回サイトワールドにおいて、日本点字普及協会は「今日は、日本点字126歳の誕生日」と題して二つの行事を行いました(2016年11月1日)。第1部は講演会で、第2部は、Lサイズ点字触読体験と、凸面点字器試作品の展示でした。第1部の講演会は、「点字と社会参加—日本と海外の状況を比較して—」(講師：指田忠司氏)、および「モンゴルの点字の事情」(講師：バトバヤル・エンフマンダハ氏)でした。ともにグローバルな視点に立った内容でした。ロイさんの巻頭言もそうですが、点字もこれからは、さらに国際的な立場に立って眺める必要があるのかもしれない。

他団体とも、ともに学んで日本の点字研究・実践・普及に努めていきたいと願います。

(金子昭)



日 本 の 点 字 第41号

---

---

2017年6月4日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

---

---